

P-093

当院におけるNST活動と今後の課題

深谷赤十字病院 NST

○佐藤亜希也¹、釜田 茂幸、山田 栄子、杉山 俊彦、
富施 哲也、稲山 拓司、新田 宙

【目的】当院は平成24年7月に栄養サポートチーム加算（NST加算）を取得し、同年11月には電子カルテが導入された。今回、NST加算取得と電子カルテ導入によりNST活動にどのような変化が現れたかを検証した。

【方法】NST加算取得前後6か月のNST回診延べ患者数、新規介入患者数、病棟からの自主的依頼件数、終了時評価を比較した。電子カルテ導入に伴い、入院時栄養スクリーニングを摂食嚥下シートからSGAシートへと変更したが、その入力率を調査した。

【結果】NST回診延べ患者数は、加算取得前：22人/月→加算取得後：43人/月と増加した。新規に依頼があった患者数は38人→46人であり、そのうち病棟からの自主的な依頼は19人→33人であった。終了時評価としては、改善：25人→24人、不変：11人→18人、悪化：2人→4人と不変・悪化が増加した。電子カルテ導入により、カンファレンスの時間短縮が得られ、効率化に繋がった。しかし、SGAの入力率は74%と低値であった。

【考察】NST加算取得を積極的にPRしたことで、新規依頼数が増加した。なかでも病棟からの自主的な依頼が増えたが、これはスタッフの意識の変化と思われる。終了時評価の改善に繋がらなかったが、当院では早期の退院・転院が多く、栄養改善前に退院・転院する患者が増加したことが原因と考えられた。従って入院早期にNSTが介入することにより、終了時評価の改善が期待できる。電子カルテ導入により、カンファレンス時の雑務軽減と議論活性化が得られた。一方でSGAの入力率は病棟間に差があり、スクリーニングとしての機能が十分に果たせていないと思われた。

【まとめ】NST加算および電子カルテ導入後のNST活動を検証した。当院の様な急性期病院では早期のNST介入が必要であり、その為にはスタッフの更なる教育が必要と思われる。

P-095

那須赤十字病院における入院栄養指導の取り組みと今後の課題

那須赤十字病院 医療技術部栄養課¹、
那須赤十字病院 医療技術部長²、
那須赤十字病院 副院長³

○高野 岬¹、石田 周子¹、松田 千鶴¹、根本 真人²、
白石 悟³

【はじめに】

栄養指導の目的は、患者の栄養状態を改善し、健康の維持増進、疾病の予防や治療に貢献することである。栄養指導は、医師の指示に基づいて行うが、当院での栄養指導件数は、月100件前後と決して多くない状況であった。そこで2012年12月の医局会で、入院期間中に特別食を摂取している全ての患者に対し、栄養指導を行う方針となった。

【方法】

2013年1月より特別食を摂取している患者を対象に、栄養指導の介入を行った。介入方法は、患者の栄養状態を評価し、栄養の過不足から患者の状態や病状に応じて、摂取能力や量を考慮したうえで食品・料理・献立・調理法に至るまで、より具体的に患者に合わせた指導を行った。評価項目は、指導の件数、医師・看護師の業務負担の軽減、収益とした。

【結果】

栄養指導の件数は、月300件を超え、医師・看護師の業務負担の軽減になり、更には増収をもたらした。

【考察】

今回の栄養指導件数の増加は、患者の栄養・食生活の知識の向上をもたらすと考えられた。また、栄養課スタッフが病棟へ参画したことは、医師をはじめ、病棟スタッフ・他職種との連携を強化することができ、より上質な指導を可能とした。今後の課題は、栄養指導の内容を充実させ、外来指導件数の増加を目標とし、患者へ良質な栄養療法を提供できるように取り組んでいきたい。

P-094

NST院内出張勉強会の効果と課題

三原赤十字病院 栄養課

○川崎 圭介¹、香川 哲也、古井 佳子、向井 朋美、
榊川 真由、早川 明宏、松岡奈緒美、竹中 恵美、
柳迫 三寛、濱本 裕子

【はじめに】当院NSTは院内スタッフへ向けて栄養に関する知識の普及と啓発を目的として勉強会を開催しているが、開催時間が就業後であるといった理由で参加者が減少傾向にあり、目的を果たさない状態にあった。より積極的な啓蒙活動を行うべく、平成24年度より「来てください」から「行かせて下さい」をモットーに講義室から各病棟へ赴く『出張勉強会』を開催したのでその効果と課題を報告する。

【方法】1テーマを各病棟(全5病棟)で開催した。講義時間は15分とし、比較的集合が容易な時間帯(13時～14時)を利用した。場所はスタッフステーションで行った。事前に病棟スタッフ以外の職員にも広報で連絡し、誰でも参加可能とした。さらに、効果と課題を検証するため参加の有無に関わらず、医師・コメディカルを中心にアンケート調査を実施した。

【結果】平成24年度は4回開催した。参加人数は1テーマ平均60名で、前年度(平成23年度は平均18名)よりも大幅に増加した。参加者内訳は病棟看護師が多数で、医師、薬剤師、リハビリ、調理師が若干名であった。アンケート調査では、参加経験者の75%から「全て又は一部の講義が業務に反映できた」との回答が得られた。参加未経験者では、不参加理由として「勤務の都合で参加不可能」が70%、「知らなかった」が17%であった。

【考察・課題】出張勉強会は就業後に講義室で行う従来の方法と比較し、多くのスタッフが参加できる有効な手段であることが判明したが、参加未経験のスタッフも多数にのぼり、完全に目的を果たしてはいない。「容易に参加ができる体制作り」「参加が困難な場合の対策」「広報の見直し」が今後の課題であるといえる。

P-096

事務部との連携により広がりを見せた栄養課の取り組みについて

徳島赤十字病院 栄養課¹、徳島赤十字病院 総務課²、
徳島赤十字病院 人事課³、徳島赤十字病院 教育研修課⁴

○多田 睦美¹、岡田 克枝¹、藤崎 謙昌¹、吉川 和彦²、
豊野 勝之³、秋田 敏男⁴、栢下 淳子¹

【はじめに】当院は全職員で独自の「徳島赤十字病院の文化」を作ろうとしており、働きやすい職場を目指して福利厚生にも力を注いでいる。臨床研修医においても研修して良かったと思ってもらえるような研修を目指している。栄養課(直営)の業務は患者へのフードサービスや栄養管理であるが、事務部との連携も密になり最近では活動の場が広がりつつある。今回、職員の福利厚生などに関することにも協体制がとれるようになったのでその取り組みを報告する。

【目的】職員の働きやすい環境作りのサポート

【対象】全職員

【協力方法】全職員:院内保育園への食事提供、ホスピタルカフェの運営、誕生日のホスピタルカフェクーポン券発行、職員研修会への菓子提供 研修医:月一回のランチョンセミナー実施時に昼食の提供。

【結果】院内保育所の昼食を月～土曜に作成し、初年度は5食/回であったが、現在では20食/回に増加している。ホスピタルカフェの職員の利用率は10～15名/日である。研修医のランチョンセミナーは平均22食/回であった。

【考察】研修医の年齢は20歳代が多く、若者の好むような料理が好評であった。中華料理であった。ランチョンセミナーのような緊張を伴う場面でも、職員手作りの昼食が気持ちをやわらげるツールになっていると思われる。院内保育園の食事も子供たちの喫食率は高く親たちからも安心だという意見が多い。ホスピタルカフェについては職員への励ましにもなったり癒しにもなったり好評であり未永く継続してほしいとの声がある。今回のような取り組みが職員にどのような影響を与えたかを継続して評価していく必要がある。